

## P10-25

### 健診における腹部超音波検査の現状

高山赤十字病院 放射線科

○今井 丈晴

【はじめに】“健診”とは自分自身の健康状態を把握し、病気を未然に防ぐことができる効果的な手段であり、診察や各種の検査（生理学的検査・検体検査・画像診断検査）で健康状態を評価することで健康維持や疾患の予防・早期発見に役立てるものである。今回、当院の健診における腹部超音波検査の現状（統計・検査環境・検査方法・システム等）について報告する。

【内容】統計：年間約2600件の腹部超音波検査を行っており、男女比は約6：4で、年齢分布は40代から50代の受診者が中心である。検査環境：約8畳の広さの部屋に超音波装置1台とベッド、レポート作成用のPC1台、電子カルテ端末PC1台、技師1人で1日平均11件の検査数（5～17件）を行う。検査方法：走査ルーチンに従い、上腹部を中心に肝臓、胆嚢、腎臓、膵臓、脾臓、腹部大動脈の観察と、下腹部の膀胱、前立腺、子宮、卵巣、消化管等の観察を行う。記録画像は20～25画像となる。システム：技師がレポートPCによりレポートを作成し、担当医師によりレポートを承認、DAICOM PDF形式として画像サーバに保存し、各電子カルテ端末からの閲覧を可能としている。

【おわりに】健診における腹部のスクリーニング検査に、超音波検査は最適であるといえるが、その検査の再現性や診断・評価に関しては、検査状況や担当技師のレベルに大きく左右される。限られた短い時間の検査で、どれだけよい検査ができるかが重要である。

## P10-26

### 上部消化管X線造影検査（施設内検診）の精度向上への取り組み

高山赤十字病院 放射線科

○中井 良

【はじめに】近年、日本消化器がん検診学会は胃X線検査の標準化のため二重造影主体の“新・胃X線撮影法”（以下、新撮影法）を推奨し、検査に使用するバリウムも200～230W/V %、150ml前後の高濃度低粘性のものになっている。当院では平成19年3月まで150 W/V %、200mlのゾル製剤バリウムを使用していた。今回、検査の精度向上のため、胃X線撮影法と使用バリウムについて検討したので症例とともに報告する。

【方法】ゾル製剤バリウムを使用し、従来胃X線撮影法で撮影した画像と、高濃度低粘性バリウムを使用し、新撮影法で撮影した同一被験者の画像を技師5人でバリウムの付着、胃壁の描出能を比較検討する。尚、被験者は無作為に抽出した。

【結果】バリウムの付着、胃壁の描出能について全体の76%が高濃度低粘性バリウムを使用し、新撮影法で撮影した画像の方が良いと答えた。また、撮影法・使用バリウムの違いによる要精査となる有所見数の比較では、従来撮影法では前壁病変0件、噴門部病変1件に対し、新撮影法では前壁病変3件、噴門部病変4件であった。これらより、高濃度低粘性バリウムの使用と新撮影法を取り入れたことで上部消化管X線造影検査の精度向上は達成できた。

## P10-27

### 健康診断受診者への保健指導の効果

諏訪赤十字病院 健診部

○濱 さつき、渡辺 秀彦、柳原 園子、中村 陽子、樋口 成美、勝野 有里子

【目的】S院では医師の結果説明後に保健指導を行っている。しかし毎年保健指導を受けているにもかかわらず生活習慣に変化がみられず、健診結果の改善がみられない受診者もいる。そこで現状の指導に何が足りないのかを探り、生活習慣改善につながる効果的な保健指導を行うために研究に取り組んだ。

【方法】1KJ法で挙げた「効果的な保健指導ができないと思われる要因」をもとに作成したアンケートによる調査

2対象 S院の日帰り・一泊ドックを受診し、保健指導を受けた人121名

3実施期間 平成22年1月12日～1月22日

4倫理的配慮 研究の趣旨、回答は任意であり回答しないことで不利益は生じない、データは統計的に処理し個人が特定されることはない、研究以外には使用しない、アンケートに回答したことで研究に参加することに同意したとみなすことを、説明文書に明記した。またS院倫理委員会に諮り承認を得た。

【結果】「保健指導を受けて運動や食生活などの生活改善をしてみようと思いましたが」という質問に98%が「はい」と答えた。ほとんどが「生活習慣を改善しようと思った」と答えたため、改善する気持ちになれない理由からは指導に何が足りないのかを導き出すことはできない。そこで生活習慣を改善しようと思った理由で、回答数の少なかった内容を強化しようと考えた。その結果、受診者は新しい知識を望んでいること、病気と生活習慣の関係はわかったがそれが将来的にどのような結果に結びつくのかの理解が少ないこと、保健指導担当者は話し方やスピードを考えながら、わかりやすくかみ砕いて説明することが必要であることを導いた。

## P10-28

### 『待ち時間調査を実施して～分析方法としてダイアグラムを用いて～』

秋田赤十字病院 健診部（健康増進センター）

○佐々木 智子、畠山 薫子、佐藤 公子、佐藤 真紀子、中道 桃子、齋藤 敏子、大泉 明美

【目的】当健康増進センターを利用される受診者の待ち時間の実態を調査し、改善が必要な問題点を明確にする。

【対象及び方法】2010年2月1日から3日までの受診者のうち同意を得られた1日ドックの受診者74名、2日ドックの受診者32名を対象とした。コーディネーター、各検査担当者が順番、検査開始時間、検査終了時間を待ち時間調査用紙に記入し、各検査終了時間と次の検査開始時間の差を待ち時間とした。健診終了後、受付カウンターにて事務職員が調査用紙を回収した。集計分析方法としては、待ち時間の秒数を四捨五入し、各検査時間別、男女別、日にち毎及び3日間の平均で集計し、分単位とした。ダイアグラムも作成し、受診者一人ひとりの動線を明らかにした。アンケート形式の待ち時間意識調査も同時に実施した。

【結果及び考察】結果を分析する方法として、視覚で捉えやすく、比較検討しやすいことからダイアグラムが有効であった。当センターでは、男性と比較し、女性の待ち時間、平均所要時間が長いことがわかった。女性は婦人科・乳房検診を受ける人が多い。このことが待ち時間や平均所要時間の長さに関わっているため、この時間帯の流れを見直す必要がある。また、実際待ち時間が長かった検査項目と、待ち時間意識調査で長いと感じた検査項目がほぼ同じだったことから、今後は検査の流れや待ち時間の有効利用等を検討して改善したいと考えている。今回の調査ではスタッフの声かけや丁寧な対応、配慮により、待ち時間が長くても苦情にはつながらなかった。

【総括】今回の調査の結果及び考察を基に、よりよい健診を受診者に提供できるよう、スタッフ間の連携を密にし、意見を出し合い、試行錯誤しながらさらなる質の向上に努めたい。